

2022年12月22日

2022年11月 Nr. 501

今回は、孤独死や孤独死をした人たちのための葬式が取り上げられています。

クリスマス前の4～5週間前が最初のアドヴェント（待降節）です。それは日曜日です。この日曜日の1週間前は死者慰霊日（Totensonntag）です。その前の水曜日は懺悔と祈りの日（Buß- und Betttag）です。しかしながら死者を偲ぶのは死者慰霊日においてだけでなく、既に1週間前の日曜日、すなわち国民哀悼の日（Volkstrauertag）においてもそうです。そして、カトリック教徒には更に11月1日の万聖節（Allerheiligen）と11月2日の万霊節（Allerseelen）が加わります。このようにドイツでは11月は悼む機会が多い季節です。その分最初のアドヴェントによりクリスマスの時期がスタートすると、その分人々の喜びも格別です。

しかしながら、誰かが亡くなった場合には、個々の死者を常に悼みます。亡くなった人は、埋葬されます。そして、彼らが墓地に埋葬される場合、beisetzen という言い方もします。というのは、そこには既に他の死者が眠っているからです。亡くなった人は大抵、今の時代には、火葬され、その後でその遺灰は骨壺に納められます。誰かが遺体として埋葬されることになった場合、ドイツではその遺体を棺に納めなければなりません。埋葬費用は死者の近親者が支払わなければなりません。彼らには埋葬義務が課せられています。

しかしながら、人によっては孤独の中で誰にも看取られずに亡くなります。埋葬の費用を支払うことができる近親者がいない場合、死亡者が最後に生活していた自治体（都市）が埋葬の費用を支払わなければなりません。これを担当するのは市公安局です。それでこれは市公安局による葬儀であると呼ばれます。その葬儀はできるだけ安価であるほうがよいです。

臨死介助・看取りも担当している、プロテスタントの社会福祉団体のある女性担当官は、最も安価な埋葬は、遺体が収集され、一括輸送により火葬場に運ばれる場合、東ドイツの5州または東ヨーロッパの国において茶毘に付すこと、つまり遺体の火葬と骨壺での埋葬を行うことであることを確認しました。こうしたやり方により一遺体の葬儀を80ユーロで行うことができます。

しかしながら、大抵の都市は、自らの市民・住民の一人がその都市の費用で埋葬されなければならない場合、そこまで節約しようとは考えていません。ケルン、ゲルゼンキルヒェ

ンそれにマインツではここ 2, 3 年来、孤独死した人の内のキリスト教信者のために葬儀が行われています。なぜならば、亡くなる人の 50%は常にキリスト教信者だからです。

ドイツではすべての死亡者の内、23%が自宅で亡くなっています。ボーフム大学の女性社会学者は、自宅で亡くなったとき、誰からも気づかれなかった人たちについて博士論文を書きましたが、彼女は彼らのほぼ 25%が該当することを調査により確認しました。当初発見されないで亡くなった人の内、80%がその後 1 週間以内に発見されています。残りの内 15%は死亡から 1 ヶ月以内に発見されますが、残りの 5%の人においては遺体が誰かに発見されるまでに 1 ヶ月以上が経過しています。彼女がアーヘンにおいて自ら調査したところによりますと、そのような遺体が発見されるまでに 1 年が経過するというような事さえも起きていることを確認しました。

ゲルゼンキルヒェンにおいては、彼女はある女性死亡者の隣人たちと話しました。その死亡者の遺体は 6 階の賃貸住宅の住居に 130 日間置かれたままになった後ようやく、発見されたものでした。2, 3 人の賃借人はその死亡者の郵便受けが溢れているのを訝しく思いながらも、管理人には問い合わせをしていませんでした。その死亡者は、27 年間その住まいに住む中年女性でしたが、誰 1 人彼女がいないことに気づきませんでした。彼女の住宅から来る死体の臭いにも誰も気づきませんでした。

プロテスタント系の女性牧師は、孤独死したキリスト教信者のためにゲルゼンキルヒェンにおいて教会の葬儀を行うだけではなく、人が彼らが運ばれる墓への最後の道において同行するのも取り計らいましたが、そのようなことは実にひどいことであると思っています。

彼女は、何ヶ月もいないことを誰にも気づかれない人々がいるという事態になぜ至り得るのか理解できません。しかしながら、もっとひどいのは恐らく、生後数時間、数日または数ヶ月しかたっていない子供たちが埋葬されること、そして親族のだれもが、そして両親さえもが彼らの埋葬に関心がないように見えることでしょう。ゲルゼンキルヒェンにおいてはそのような事例が 1 年の間に一度ならず起きているのです。そのような棺の後を（墓地に向かって）歩くのはつらいものです・・・。

さて、今回、孤独死したキリスト教信者のための葬儀を教会が行っていることが紹介されましたが、改めてドイツではキリスト教信者がどれ位いるのか調べてみました。Wikipedia によれば、ドイツでは 2021 年現在、キリスト教信者が全人口の約 53%です。また、ドイツの宗教人口の推移を調べてみましたところ、1980 年代初めにはカトリック及びプロテスタントを合計しますと 80%（旧西ドイツのみ）を超えていました。ところが、2000 年頃には 60%（旧東西ドイツ合計）となり、現在では上記以外のキリスト教信者も合算しても、

約 53% (同) まで減っています。教会税の支払いもその一因となっているようです。そして konfessionslos (無宗派) の人々が 42% にまで増えています。この傾向はこれからも続くのでしょうか。気になるところです。

ところで、日本における孤独死に関する資料について調べてみましたが、全国レベルのものはないようです。いくつかの都道府県単位ではあるようですが、東京都に関しては 23 区において発生し、東京都監察医務院で取り扱いのあったデータがありました。それによりますと、2003 年には孤独死をした人の数が 1,441 人でしたが、2020 年には 4,207 人と 3 倍近くまで増えています。この数字を多いとみるべきなのか、それほどでもないともみるべきなのかは意見の分かれるところかもしれませんが、私には 2003 年から 2020 年と年を経るにつれて急増しているのが問題ではないかと思います。

孤独死は高齢者だけの問題ではありませんが、高齢者の占める割合が圧倒的に多いようです。日本でも高齢化が進んだことで、高齢者の一人暮らしが増えています。そして、今後もさらにこの傾向は強まるものと懸念されます。他人や地域とのつながりが薄くなった結果、起こりやすくなっていますが、孤立を避けるために、例えば、高齢者施設への入居を推進したり、社会と積極的に関わりを持つように促したり、自治体や民間企業などによる見守りサービスを活用したりするなど様々な対策が行われています。今回の放送では孤独死を回避したり、孤独死の発見を早めたりする方策については触れていなかったようですので、ドイツでの具体的な取り組みはどうなっているのか知りたいところです。

また、今回話題になっている孤独死から発見までの日数ですが、別の機関が 2020 年 11 月に発表している東京都 23 区における 2019 年 (合計 4,011 人) の資料によりますと、以下の通りとなっています。

3 日以内約 50% 4~14 日約 28% 15~29 日約 12% (29 日以内は約 90%)
30 日以上約 10% (平均は 17 日)

ポーフォーム大学の女性社会学者が紹介している資料では「80%がその後 1 週間以内に発見され、残りの内 15%は死亡から 1 ヶ月以内に発見されます」ので、95%が 1 ヶ月以内に発見されている計算です。母数がどれくらいか不明ですので、上記の東京都 23 区との単純比較はできませんが、1 ヶ月以内に発見された比率だけみると、かなり近いのではないかと思います。もっとも死後 1 ヶ月というのは遺体の腐敗も相当進んでいると思われるので、やはりできるだけ早い時期での発見が強く望まれるところです。本来であれば、孤独死は根絶されるべきだと思いますが、独居高齢者が増える状況では難しいと思われます。それでも極小化のための取り組みは少なくとも最大限行われるべきだろうと思います。

K. K.

2023年1月26日

2022年12月 Nr. 502

今月は、ドイツのある長期受刑者について取り上げられています。

ブレーメン郊外にある刑務所のある長期受刑者のファーストネームはヘルムートさん (Helmut) といいます。刑務所 (Gefängnis) という言葉の代わりに、刑の執行施設 (Strafvollzugsanstalt) や司法の執行機関 (Justizvollzugsanstalt) (略して JVA) などとも言うことができます。グルーベさん (Frau Grube) とヴェルナーさん (Herr Werner) は、ラジオブレーメンのドキュメンタリー番組の録音をするために何度もちょっと刑務所の彼を訪ねました。2人が最初にヘルムートさんに会った時は、まず第一に顔合わせのためだけに、まだマイクを携帯せずに刑務所の彼のところに行きました。それは2014年のことでした。

3月には彼らはマイクと録音機を携えて、刑務所の独房のヘルムートさんのところへ行きました。マイクの前で彼はバイエルン出身のヘルムートですと言いました。その当時彼は62歳でした。この62年間の生涯の内40年間を刑務所で過ごしました。まともに働いたことなど全くありませんでした。刑務所外で過ごした僅かな期間には、泥棒、強盗、麻薬などの犯罪により金策をしていました。

彼は自分自身のことを職業的常習犯と称しています。ニーダーザクセン州の複数の刑務所で服役していましたが、2012年秋にブレーメンに移送されました。おそらく彼自身の希望によるのだらうと思います。なぜならば、ブレーメンの刑務所について、彼が話していたのは、ここの刑務所は全ドイツ中で唯一、実際に治療が行われていること、そして収容者が社会復帰していると思っっているということでしたから。それゆえに彼はそこにいるとのことでした。

ヘルムートさんは1952年2月にミュンヘンで生まれました。4歳の時でしたが、父親が労働災害で亡くなりました。ちょうどその頃、彼もまた、児童遊園の事故で片目の視力を失いました。6歳で学校に入学した時、同級生から彼の義眼が原因でからかわれました。母親は再婚し、更に3人の子供ができました。継父は酒を飲んでしばしば彼に暴力を振るいました。

彼が繰り返し刑務所に収容されていた間、1984年に結婚し、妻の姓を名字として受け入れました。その結婚は4年間続きました。その間もずっと、彼は刑務所に収容されていま

た。彼の妻については、彼自身が刑務所から発していた交際相手を求める広告を通じて知り合いました。彼には姉（妹）が1人いますが、連絡を取りたくありません。なぜならば、彼女は長い間、重い病気を患っているからです。

そうこうする内に80歳になった女性は少しばかりヘルムートさんの面倒を見ています。彼女は公式の司法執行助力者（Justizvollzugshelferin）です。彼には月に一度手紙を書いたり、時には彼と電話をしたりしています。彼が刑務所をちょっと2、3時間ばかり出ることが許されたときは、2人は一緒にアイスクリームを食べ、散歩をしました。しかしながら、彼女はその後で彼に手紙を書き、そうこうするうちにこの仕事をするには年を取り過ぎてしまったことを伝えました。従って、ヘルムートさんはヴェルナーさんに彼女の仕事を引き受けてくれないだろうかと尋ねました。ヴェルナーさんは、「引き受けましょう」と言い、それならヘルムートさんには刑務所の外の生活の現実、例えば、どのようにして切符を自動券売機で買うかに慣れさせたほうがいいだろうと考えました。

刑務所においてケスターさん（Herr Köster）はヘルムートさんを担当しています。彼はそこで既に1995年から刑務所の公務員（刑務官）です。彼は、刑務所は「全制的施設（eine totale Institution）」であり、従って、刑務所に入所してくるすべての人はまず、平等に取り扱われなければなりません、しかしながら、入所者の個々人に必要なものが何かということについても目配りをする必要がある、と言います……。

2017年夏、ヴェルナーさんはヘルムートさんの2回目の釈放に同行しました。その時、ヘルムートさんは突然、ヴェルナーさんと一緒に刑務所に戻らないと言いました。2、3日の自由はヘルムートさんにとって他のすべてより重要とのことでした。その時、ヘルムートさんは震え始めました。

態度良好ゆえに予定よりも早く釈放されることを今やもはや望み得ないことについては、ヘルムートさんは考えなくなりました。これにはヴェルナーさんは驚きました。ケスターさんもびっくりしました。しかしながら、その1年半後に、それに対して理解できるとケスターさんは言いました。なぜならば、ヘルムートさんは刑務所にすっかり依存してしまっていたので、出所した場合、自分の生活をすべて自分自身で整えることができないという不安があったためです。その代りに彼は3日間の自由を満喫しました……。

さて、今回取り上げられている長期受刑者のヘルムートさんは62年間の生涯の内40年間を刑務所で過ごしたとのことでした。現在は70歳（1952年2月生まれ）になっていますので、70年間の内、合計で45～50年を刑務所で過ごしたという計算になるかもしれません。ヘルムートさんの場合はかなり特殊だと思いますが、16歳の時の犯罪により少年刑務所に

送られて以来、それほど長い間刑務所で過ごしてきたとは彼にとって人生は何だったのでしょうか。初めの切っ掛けは恐らく、4歳の時父親が労働災害で亡くなり、自らも児童公園で片目の視力を失ったことでクラスメートから義眼をからかわれたこと、そして母親の再婚相手である継父から暴力を振るわれたことなどの不幸が重なって非行に走ったのだらうと推測します。確かにこのような不幸が重なったことは彼には非常に不運であり、同情すべき点だらうと思いますが、その後も更生の機会は何回かはあったのではないかとも思います。しかしながら、その都度それを生かすことができず、また彼を助けてくれる人との出会いに恵まれなかったのだらうと思います。ともかく彼は人生の軌道修正することなく、犯罪を繰り返したため、彼の人生のほとんどと言える程の長い刑務所生活を余儀なくされてしまいました。

テキストによりますと、ヘルムートさんの加齢に伴う諸制約・諸症状が2016年頃から悪化し、1年前からは生まれ故郷のミュンヘンの介護施設で生活をしているとのこと。また、彼の現在の健康状態は更に悪化しているといえます。現在70歳のヘルムートさん、来し方を振り返って何を思っているのでしょうか。彼の人生を思えば思うほど、同情を禁じ得ないとともに、別の生き方はできなかつたものだらうかと暗澹たる気持ちになります。

ところで、今回の課題・放送では刑務所の公務員（刑務官）も登場しますが、私が学生時代に約5ヶ月間ホームステイしていたドイツ人家庭のご主人がたまたま刑務所に勤務していたことを思い出しました。当時私はゲーテで指定された家庭にホームステイすることになっていました。その家に到着した初日に自己紹介をしあつたとき、ご主人から「Gefängnisで仕事をしている」と言われました。当時はこの単語を知らませんでしたので辞書を片手に会話をし、この単語の意味を知り驚きました。なぜならば、普通の会社員の家庭に滞在するものだと思っていたからです。彼の具体的な仕事内容についても少しは説明を受けたのだらうと思いますが、余り理解ができませんでした。ただ彼が交替勤務制で働いているということだけはわかりました。なぜならば、彼が勤務後帰宅した時にいつでもシャワーを使用できるようにするために、私がシャワーを使用することができないことをこの時言われたからです。この家庭では、皆さんが親切に話し相手になってくれたり、クリスマスの夕食に招待してくれたり、自転車を自由に使用できたり等大変お世話になり感謝していましたが、シャワーを使用できないことが唯一不満でした（そのため近くのプール施設に泳ぐためではなくシャワーを使うために頻繁に通っていました）。到着初日もう少しドイツ語が理解できていれば、彼からドイツの刑務所に関する話も聞けたのかもかもしれません。今から考えますと、当時の私のドイツ語理解力不足のために貴重な機会を逃してしまい、少し残念だったと思います（その後の滞在中には刑務所の話が話題になったことはなかったと思います）。

K. K.